

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520627

研究課題名(和文) 幼少期に来日したブラジル人児童生徒へのケアの試み - 学校間の相互理解から -

研究課題名(英文) An Effort to Provide Care to Brazilian Students Residing in Japan at an Early Age: Gaining Mutual Understanding between Schools in Brazil and Japan

研究代表者

川口 直巳 (Kawaguchi, Naomi)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：60509149

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)： 現在日本に滞在している日系ブラジル人の多くは滞在長期化、定住化の傾向が進んでいるが、彼らの子ども達の進学問題は依然大きな課題となっている。本研究では、日本とブラジル両国での調査を行い、子ども達を取り巻く様々な問題を浮き彫りにし、それを学校間で相互理解することで問題解決に向けて一歩を進めようと試みた。

本研究における調査から、主に3点が明らかになった。ブラジル人学校の教員は、公立学校に在籍経験のある児童生徒をどのように捉えているか。公立学校に在籍経験のある児童生徒とその保護者は在籍した公立学校をどのように評価しているか。帰国後子ども達の日本語とポルトガル語の語彙力はどのように変化するか。

研究成果の概要(英文)： While the trend of Brazilians of Japanese descent to seek long-term or permanent residence in Japan increases, academic success of their children remains problematic. This research, performed in Japan and Brazil, clarified problems related to such schoolchildren and pursued resolution methods based on mutual understanding between schools in both countries.

Survey findings revealed 3 questions central to this issue. 1) How do Brazilian teachers approach children with enrolment experience in public schools? 2) How do schoolchildren and caretakers evaluate the schools in which they were enrolled? 3) How do the Japanese and Portuguese language skills of school-aged returnees change?

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：ブラジル人児童生徒 滞在長期化 公立小中学校 ブラジル人学校

### 1. 研究開始当初の背景

一言で「来日児童生徒」と言っても、まだ来日間もなく日本語でのコミュニケーションが難しい子ども達と、幼少期に来日し日本語でのコミュニケーションには支障がない子ども達とは大きな違いがある。最近では日本生まれの子どもも多くなってきている。一見日本語には問題がないように思われるため、幼少期に来日、または日本生まれの子ども達の問題は現場でも見落とされがちであるが、成長するにつれて教科学習内容の理解が困難となるケースが多い。このような子ども達に着眼した研究もまだ十分ではないのが現状である。日系ブラジル人の滞在の長期化、定住化傾向が進んでいることから考慮しても、こうした子ども達のケアを目指す研究が必要不可欠であると思われる。ブラジル人児童生徒と共に学校生活を送る日本人児童生徒の教育環境を考えるにあたっては急務の課題と思われる。

### 2. 研究の目的

現在、来日日系ブラジル人の中には、2008年の経済不況や震災の影響で帰国者も多かったが、日本に残った彼らの多くは、滞在長期化、定住化の傾向も進んでいる。彼らの子ども達も幼少期に来日していたり、日本生まれの子ども達が多くなっている。こうした子どもたちは、日本での滞在が長いため、一見日本語での教科学習に問題ないと思われがちであるが、そうではない。日本語と母語の両言語のレベルが低いため、教科学習内容の習得は依然として困難となっている。広い視野からの早急な支援体制を整える必要がある。本研究は、実態調査と共に、立場が違う複数の受け入れ学校の相互理解から、連携したケアの推進を目指すものである。

### 3. 研究の方法

#### (1)平成 23 年度

平成 23 年度は、下記 2 つの実態調査を行った。ま。

公立の小中学校教員へのインタビュー調査。

第 1 回ブラジル調査：帰国児童生徒とその保護者へのインタビュー調査と語彙調査。

#### (2)平成 24 年度

平成 24 年度は、下記 3 つの講演会と実態調査を行った。

ブラジルから講師を招いての講演会(テーマ：「自己教育体験と帰伯児童教育の現状」)

ブラジル人学校での調査：教員対象アンケート調査及び面接調査。

第 2 回ブラジル調査：帰国児童生徒とその保護者へのインタビュー調査と語彙調査(縦断調査を含む)。

#### (3)平成 25 年度

平成 25 年度は主に下記 2 つの実態調査を

行った。

ブラジル人学校での調査：公立学校に在籍経験のある児童生徒とその保護者へのアンケート調査(現在もアンケート用紙回収中)。

第 3 回ブラジル調査：帰国児童生徒とその保護者へのインタビュー調査と語彙調査(縦断調査)。

また、研究期間を通して、各調査機関、調査対象者に調査結果報告を行った。

### 4. 研究成果

研究成果として、ここでは本研究で行った主な調査結果とブラジル人児童生徒へのケアの試みを紹介する。

#### (1)ブラジル人学校での調査 1(ブラジル人学校の教師対象アンケート及び面接調査)

この調査の調査対象は日本にあるブラジル人学校の教師 14 人である。事前にアンケート(17 項目)を配布し、その後半構造化面接を実施した。調査対象 14 人のうち、協力を得られた 12 人のデータを分析した。

公立学校在籍経験児童生徒の特長

公立学校在籍経験児童生徒について、気になる点(問題と思われる点)と評価できる点をあげてもらった。

##### 気になる点

・「ポルトガル語の能力の低さ(12 名中 8 名)。

・「積極性に欠ける」(12 人中 3 名)。

「分かっている答えでも自分から答えるのをためらう」、「無意欲」、「無感覚である」

##### 評価できる点

・「規則を守る」、「学びに献身的」、「行儀がいい」といったマナー的な部分(12 人中 6 人)。

・バイリンガルになる可能性があることへの評価(12 人中 2 人)。

公立学校在籍経験児童生徒とそうでない児童生徒との比較

公立学校在籍児童生徒とそうでない児童生徒とを 1 授業への参加、2 クラスメイトや先生との接し方、3 宿題や提出物、4 学習内容の理解、5 精神面という 5 点において比較してもらった。

##### 1 授業への参加について

・公立学校経験者とそうでない児童生徒で特別な違いはない(12 人中 4 人)。

・公立学校経験児童生徒の方が授業に参加できていない(12 人中 6 人)。

##### 2 クラスメイトや先生との接し方

・公立学校経験者とそうでない児童生徒で特別な違いはない(12 人中 5 人)。

・公立学校経験児童生徒とそうでない児童生徒に違いがある(12 人中 5 人)。

公立学校経験児童生徒の方が「おとなしい」、「教員に対して敬語を使う」、「分からない時も聞かない」、「閉ざされた感じがある」

##### 3 宿題や提出物について

・公立学校経験者とそうでない児童生徒で特別な違いはない(2 人中 5 人)。

・公立学校経験児童生徒は、「やることだけ

をする」「宿題提出状況がいい」。

#### 4 学習内容の理解について

・公立学校経験児童生徒とそうでない児童生徒で特別な違いはないとする意見と公立学校経験児童生徒のほうが理解ができていないという意見は同数(いずれも12人中4人)。

#### 5 精神面について

・公立学校経験者とそうでない児童生徒で特別な違いはない(12人中4人)。  
・公立学校経験児童生徒の方が「おとなしい」、「控えめ」、「内向的」、「自制し過ぎておどおどとしている」(12人中4人)。

今回の調査により、公立の小中学校に在籍経験のある児童生徒について、ブラジル人学校の教員たちは、様々な問題を意識していたり、公立学校在籍経験の無い児童生徒との違いを感じていることが分かった。日系ブラジル人日本で滞り長期化により、今後も両学校間での児童生徒の移動が見込まれる。ブラジル人学校と日本の公立学校では、文化の違いから様々な違いがあり、児童生徒が在籍していた学校の違いによってその後の教育への影響が大きいことが理解できる。このような違いを日本にある学校(ブラジル人学校、公立学校)の両者が理解して、移動する子ども達へのサポート体制を整えていく必要があるのではないだろうか。

### (2) ブラジル人学校での調査2 (ブラジル人学校に在籍する公立学校在籍経験のある子どもとその保護者対象アンケート調査)

この調査の調査対象は、日本にあるブラジル人学校に在籍する児童生徒のうち、公立学校在籍経験がある児童生徒とその保護者である。現在もアンケート用紙回収中であるが、これまで回収したアンケートの結果から以下の点が明らかになった。

・公立学校での勉強についていけない、高校に進学できなかったという理由でブラジル人学校に転入するケースが最も多い。

・公立学校でのいい思い出としては、校外学習、課外活動などブラジル人学校では少ない勉強以外の活動があげられており、高い評価がされていた。

・公立学校での悪い思い出としては、「いじめ」が最も多く、学校への要望にもいじめ問題を教師に解決してほしいことがあげられていた。

以上のような調査結果は、公立学校にも報告することで、今後の問題解決にもつながると考えられ、ケアの一つにつながったと思われる。

### (3) ブラジルでの調査

本研究機関に計3回のブラジル調査を行った。帰国した児童生徒とその保護者へのインタビュー調査と両言語(日本語とポルトガル語)での語彙テストを縦断調査として実施した。その結果、下記の点が明らかになった。  
・ほとんどの保護者が子どもに日本語力の維

持を求めている。

・子ども達は将来日本への留学を希望している。

・長年日本にいた生徒でも日本語の語彙力は非常に低いケースが多い。

・帰国後ポルトガル語の語彙力も大きな伸びが見られないケースがある(両言語での日常会話にはほとんど問題はない)。

・帰国後ポルトガル語の語彙力に著しい伸びが見られた生徒は、日本語の語彙力もある程度維持できているケースがある。

・帰国時に日本語の語彙力が高い生徒は、帰国後1年ごろまではポルトガル語の語彙力の伸びが見られなかったが、2年目には大きな伸びが確認され、年齢相応の語彙力が獲得されていた。

ブラジル調査の折に、本研究で行ったいくつかの調査結果を、ブラジル在住の日系人にも報告する機会を設けた。ブラジル在住の日系人の多くは、日本在住の日系ブラジル人の子弟に関わる多くの問題を認識していないケースが多く、初めて知ったという人も多かった。近い将来ブラジルで大学設立を予定している組織のメンバーに本研究の調査結果を報告する機会を設けたことにより、問題意識を持ってもらえ、日本在住の日系ブラジル人の子ども達への支援を視野に入れたブラジルでの大学設立を要望することができた。今後も協力者として関わることになったため、将来的にはブラジル側での支援にもつながると思われる。

本研究で得られた調査結果をブラジル人児童生徒に関わる多くの機関で共有することで、ブラジル人児童生徒に関わる人々が現在自らが実施できる具体的なケアを意識化することにもつながったと思われる。今後は、それぞれのケアの試みを共有し、改善していくことが大きな課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

川口直巳、丸井合

「在日ブラジル人生徒とその保護者の将来計画とは - ブラジル人学校での調査から - 」『愛知教育大学研究報告』(第62輯) pp.27-32 愛知教育大学、査読有 2013年

〔学会発表〕(計8件)

川口直巳、丸井合

「ブラジル人学校の教師は公立学校から転入してきた児童生をどのように捉えているか - ブラジル人学校での調査より - 」異文化間教育学会 第34回大会 2013年6月9日 日本大学 ポスター発表

川口直巳、丸井合

「ブラジル人学校に在籍する生徒とその保護者の将来計画に関わる意識 - ブラジル人学校でのアンケート調査より - 」異文化間

教育学会 第33回大会 2012年6月9日  
立命館アジア太平洋大学 口頭発表

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川口 直巳 (KAWAGUCHI NAOMI)

愛知教育大学・教育学部・講師

研究者番号：60509149